群馬の自然

特集　渡良瀬遊水地

No.168
２０１３　春

特定非営利活動法人（NPO）
群馬県自然保護連盟
URL http://www5.wind.ne.jp/shizen/
e-mail shizen@dan.wind.ne.jp

コブシ

季節のたより（2）
メジロ（メジロ科）

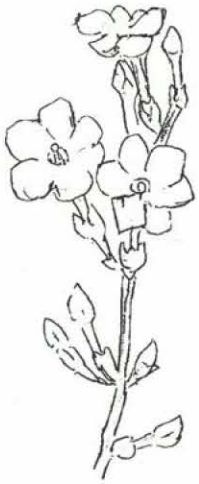
三井田　進

日本では冬季の寒冷地を除く全国で、低地から山地にまで広く分布し、春を告げる鳥として親しまれる。花の蜜を好み梅に訪れる。

撮影 糸魚川市親不知（2010. 4）

目次

表　紙　コブシ　水村　聡子　1
季節のたより（2）メジロ　三井田　進　2
特　集　渡良瀬遊水地
ラムサール条約を機会に自然を考える　金井賢一郎　3
渡良瀬遊水地の植物　青木　雅夫　3～5
渡良瀬遊水地の鳥類　深井　宣男　5～7
ギンモクセイの自生地を見つける　里見　哲夫　7～8
ヤドリギの切断面　里見　哲夫　9
植物歳時記（61）イワウチワ　吉田　龍司　10～11
図鑑の内と外　植物私記㊲　ロウヤガキ　佐鳥　英雄　11～13
群馬の地質　村誌予断　飯島　静男　14
植物をミクロで見る（9）ヤワラスゲ　青木　雅夫　14
残された自然の中で（160）
観音山鳥日誌⑥　谷畑　藤男　15～17
平成25年度行事予定　18～19
事務局日誌（168）　19
表紙の説明・事務局だより　20



ロウバイ

特集 渡良瀬遊水地

ラムサール条約を機会に自然を考える

理事長　金井　賢一郎

昨年七月に、渡良瀬遊水地がラムサール条約に登録された。

渡良瀬川沿いに群馬・栃木・茨城・埼玉の四県にまたがる33㎢に及ぶ大湿地帯で、群馬県としては、尾瀬に続き2例目の登録となる。

この拡大な湿原は、そこに飛来する多くの鳥、たくさんの植物、そこに生息する動物たちの宝庫でもある。これらの動植物については、別稿で述べることになるので、ここでは触れない。

また、この渡良瀬遊水地について語るとき足尾の鉱害の歴史に遡るのが普通だが、今回は、その自然・生態に目をむけて考えたい。

ラムサール条約は、元来「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」として、カスピ海沿岸のイランのラムサールにおいて一九七一年に締結された国際条約なので、この名称が冠せられているわけである。

ここでいう湿地とは、干潟・河川・湖沼や養殖地・水田のような人口の場所のほか、サンゴ礁なども定義に含まれる。

そこで、これからこの渡良瀬遊水地の保全活用の計画はどのように考えられえているのだろう。

〝渡良瀬遊水地を守る利根川流域住民協議会〟事務局の言を借りて言えば、「自然と歴史の野外博物館」をめざす、ということになる。

◎湿地の自然の保全、更生をはかり生物多様性を高める。

◎人々に自然環境と歴史を学ぶ場をつくる。

◎野外博物館を観光や町おこしに貢献する。

などであろうか。

県内では現在中之条町を中心に、芳ヶ平、野反湖などもラムサール条約登録をめざして準備も進んでいるようである。

大事なことは地域住民の活動が基本にあることであろう。

豊かな自然を財産とする群馬県の、これからの努力も期待されるところだろう。

自然保護連盟では、10月に自然観察会を計画しているので、多数の参加、学習されることを期待したい。

渡良瀬遊水地の植物

青木　雅夫

シーズン中に月に1度、遊水地では自然観察会が行われている。その観察会に参加すると、得るものがたくさんある。遊水地特有の植物が観察できるのはもちろんのこと、関東一円などから野生植物に興味を持った人が集まってくるので、今まで知らなかった他地域のいろいろな人々との出会いと情報交換をすることができるようになる。これも大きな財産である。

私の気に入っている遊水地の植物は、いくつもある。筆頭にあげるのがワタラセツリフ

ネソウである。ホウセンカの仲間でここでは4系統が自生している。ここは基準産地であるので、その種の遺伝子が多様なのであろう。ツリフネソウとの違いをざっと示すと、葉身の様子、花弁のうちサイドにある小花弁の形、種子の表面の模様である。実際に観察して山地で見慣れたツリフネソウと比べて欲しい。この植物を見るだけでもここに来た価値が十分にある。詳しくは大和田真澄氏のHPにある。

ワタラセツリフネソウは、カナムグラ群落中に生息しているので驚くばかりである。その芽生えの時に水没すると生育が阻害されるらしく、季節に大雨が降ると、そのエリアのワタラセツリフネソウは激減するのを昨年度に観察した。

ワタラセツリフネソウの芽生え トネハナヤスリなども見える（2006. 4. 29）

二つ目に、地味ではあるがトネハナヤスリである。シダ植物ハナヤスリ科の植物で3～5㎝程のかわいい植物である。地下茎で繋がっているので、ヨシ原の下に群生する。1969年、西田・栗田により新種として発表された植物で、渡良瀬遊水地が国内最大の生育地である。

ワタラセツリフネソウの開花（2005. 9. 10）

一緒に見られるのがエキサイゼリである。運がよいとタチスミレも見られる。何れも早春季の植物で、生活史が山地のカタクリやアズマイチゲ、ニリンソウなどに匹敵する。言い方は適当でないと思うが、コナラやミズナラ林の代わりにヨシがその役割を担う。ヨシが茂ると、トネハナヤスリやエキサイゼリは既にその年の一生を終わるのである。その近くには、ヌマアゼスゲが小穂を伸ばしている。

明るい草原ではトウダイグサ科のノウルシ、アカネ科のハナムグラが揃って群生し、明るい水辺が眩しい。低地水辺のカヤツリグサ科のウマスゲである。地面からは、ノカラマツの芽生えが群生し、夏には1.5～2.0ｍになる。

キツネノボタンの絶滅危惧種、コキツネノボタンなども興味ある植物だ。

秋にはサクラタデが美しい。晩秋までその姿を残している。イヌタデ属で興味ある植物が他にもある。ホソバイヌタデ、アオヒメタデである。

面白いのがテンナンショウ属でマイヅルテンナンショウである。

季節を換えて遊水地を訪れると、いろいろな発見がある。自転車を借りて回ってもよし、

歩いてもよい。夏は日差しが強く、２ｍ以上になるヨシ原に入ると方向が分らなくなるので注意が必要だ。かって、広大なヨシ原から出られなくなったことがある。山へ行くのと同じようにＧＰＳやコンパスは持っていた方が安全だろう。

絶滅危惧種を踏まなければ歩けない所はいくらでもある。山間部とは違った広い低地湿原に生育する渡良瀬遊水地の自然を是非満喫したいものです。

渡良瀬遊水地の鳥類

深井　宣男

はじめに

渡良瀬遊水地は約３３００ｈａにおよぶ本州最大の湿地であり、希少な植物や昆虫をはじめ、多くの動植物を有する貴重な自然環境である。チュウヒをはじめとする冬季の猛禽類で有名な探鳥地でもある。筆者は数名の友人とともに、環境省の委託事業である山階鳥類研究所の鳥類標識調査の一環として、主に小鳥類の秋の渡りを対象に、１９９０年より渡良瀬遊水地で調査をおこなってきた。ここでは23年間の調査結果の概要を報告する。なお、毎年の調査結果は、日本野鳥の会栃木県支部の研究報告集Ａｃｃｉｐｉｔｅｒに掲載されているので、そちらを参照されたい。

調査方法

鳥類標識調査とは、野鳥を捕獲し、個体識別用のごく軽い金属リングを足に付けて放鳥する調査である。この鳥が他所で再捕獲されたり、死亡鳥が拾得されることで、金属リングの番号から、その個体の移動の様子や、野外での寿命などに関する科学的データが得られるようになっている。このデータを研究所に集積し、解析がおこなわれる。結果の一部は、環境省のＷｅｂページで随時公開されている。なお、この調査は野鳥を捕獲するため、環境省の捕獲許可と、山階鳥類研究所の従事者認定が必要である。

図1　シマクイナ

図2　オガワコマドリ

結果

1．記録種について

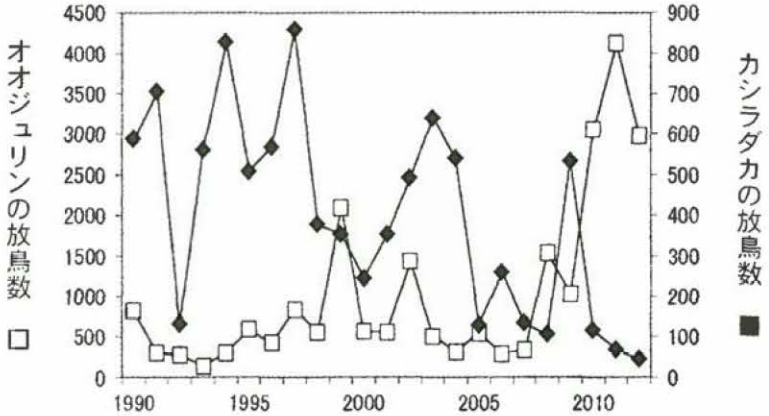
渡良瀬遊水池で記録された鳥類は約250種である。その中には、筆者らの標識調査で得られた希少な記録も多い。

1990年から2012年までの23年間における標識鳥は、111種、約6万羽であった。この中には、シマクイナ（図1）、ツリスガラ、ムジセッカ、オガワコマドリ（図2）、アカマシコ、コホオアカ、シベリアジュリンといった希な種が含まれ、栃木県初記録となったものもある。また、マキノセンニュウ、シマセンニュウなど、潜行性が強く観察では記録されにくい種の記録も得られている。さらに、ヨタカやノゴマが定期的に渡良瀬遊水地を通過していることや、オオセッカの越冬状況なども、この調査で明らかになった。

2．放鳥数の経年変化

23年間の放鳥数の合計が2000羽以上の優占種は、オオジュリン（23,640羽）、カシラダカ（9,124羽）、アオジ（5,707羽）、ツバメ（3,275羽）、カワラヒワ（2,959羽）、コヨシキリ（2,725羽）、スズメ（2,036羽）であった。このうち上位2種の放鳥数の経年変化を図3に示す。年によって調査日数などの捕獲努力量が異なるので単純には比較できないが、オオジュリンは最近3年間で著しく増加しており、カシラダカは1990年代後半から徐々に減少していることがわかる。カシラダカの減少傾向は当地だけでなく、全国的な傾向であるといわれている。

図3　優占2種の放鳥数の経年変化



3．再捕獲（回収）例について

海外との移動が明らかになったのは4種5例ある（図4）。アオバズクは当地からフィリピンへ、オオヨシキリは当地から香港へ、アオジはサハリンから当地へ、オオジュリン（2例）はカムチャツカから当地への移動が確認

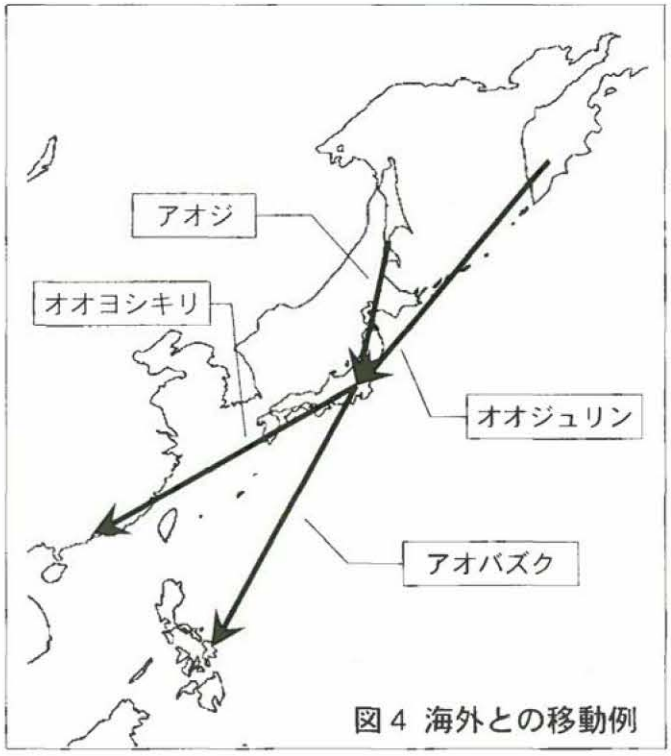


図4 海外との移動例

された。国内では、主にオオジュリンで、北海道、東北地方からの移動例が多く、新潟から上越国境を越えてきたと思われる移動例や、当地から関東各地、東海、関西、九州への移動例も得られている。一般的には留鳥であるホオジロやシジュウカラで、北海道からの移動例が得られ、幼鳥の中には長距離を移動して分散する個体がいることも実証された。また、ノゴマでは北海道からの移動例もあるが、当地で標識した個体が翌年に当地で再捕獲されたことが2例ある。これは渡り経路がかなり限定的であることを示唆している。

おわりに

筆者が山階鳥類研究所から渡良瀬の調査地を引き継ぐ前の1980年代は、3日間の調査で1000羽以上のカシラダカが捕獲・放鳥された。30年後、2012年は21日間の調査でカシラダカの放鳥数はわずかに44羽であった。一方、1996年の秋に初めて記録されたオオセッカは徐々に記録が増え、ここ数年は繁殖が確認されている。この先、渡良瀬遊水池の鳥類相はどのように変化してゆくのであろうか。少しでも良好な環境を残すために情報を提供するとともに、その変遷を見守っていきたい。

ギンモクセイの自生を見つける

里見　哲夫

モクセイ属は、「日本の野生植物Ⅱ」によるとリュウキュウモクセイ、シマモクセイ、オオモクセイ、変種としてキンモクセイ、ギンモクセイ等が記載されている。他に、ウスギモクセイを報じている本もある。

実は、1954年（昭和29）に伊勢崎市の植物研究家　高見勘次郎氏が、ウスギモクセイの結実を伊勢崎市内で見つけて発表し、大きな話題となったことがある。高見氏は「伊勢崎の植物」1968年（昭和43）にこのことを書き残している。

キンモクセイ、ギンモクセイは、ともに中国原産の常緑小高木で、雌雄異株、わが国では雄株だけが庭木や公園木として植栽されていて、雌株はなく通常結実しないとどの本も報じている。だが、国交が回復している現在において雌株が全く入っていないことにいささかの疑問は持っていた。外来植物においても日に日にその数を増しているのが現状ではないだろうか。

たまたま、一昨年より高崎市染料植物園とのご縁を通じて、周辺一帯の森を調べる機会を得た。2012年（平成24）12月22日、園内の植物観察会実施後、神宮　開、中島敬一、小暮市郎各氏等と一緒に隣接する周辺の林内の調査を実施した。沢を登り森の中間地点でギンモクセイの1m余の低木を見つけ出した。まさかと思いながら周辺の環境をもう一度見直してみたが植栽したものでないことは確かである。どうしてこんな場所に生えているのか大きな疑問を感じとった。証拠品として一枝を標本用に持ちかえった。植栽でないとすると、種子によって生えたことになる。鳥によって種子が運ばれたものだろうかと。疑問は深まるばかり、とうとうそのまま越年してしまった。神宮氏も心配して2013年1月10日に再調査を実施した。前回の調査地点より西側から調べたところ、株立ちした2株があり、更に足を進めると2株が目に止まった。思案の末標本を収めながら自然史博物館の大森威宏氏を尋ね指導を受けたところ、意外な話を聞かされた。青木雅夫氏が板倉町でもギンモクセイを見つけていたとのことであった。ギンモクセイが結実したことになると、定説を破ったことになる。これは一大事、解説の

ためにはなお親木が何処にあるかを確かめる必要がある。ある人の話によると鳥が種子を運ぶことのできる距離は400m位とのことであった。

結論としてギンモクセイが確かに自生していたことに間違いはない。書物によるとギンモクセイの花は、雄花は2個の雄しべと不完全な雌しべがあるとのことだ、もしかしたら、雌しべが完全であったならば、結実は可能となってくる。こんなことが最近の本に出ている。キンモクセイは中国原産とされているが、日本においてウスギモクセイから育成されたという説もあると。とんだ拾い物をしたことになってしまった。いよいよ分からなくなってくるばかり、専門家のご指導を頂かなければ解決できない問題となっている。したがってこの情報を発信することによってギンモクセイの自生地が更に広がることを願っている。同時に観音山周辺の調査の拡大と、親木の発見が大きな課題となっているのが現状である。調査地点の植生であるが、コナラ、クリ、アベマキ等を中心とした落葉広葉樹林と、一部はヒノキ植林地で、沢沿いはシロダモ、ヤブツバキ、アオキ、シラカシ等が多い。林下には周辺の植栽木から鳥によって種子が運ばれ発芽した、常緑樹の幼木が多数みられる。幼木、蔓等の植物としてみられるものは、下記の通りである。

マツ科―アカマツ、スギ科―スギ、ヒノキ科―ヒノキ、ブナ科―スダジイ、クワ科―イタビカズラ、マツブサ科―サネカズラ、クスノキ科―クスノキ、シロダモ、メギ科―ヒイラギナンテン、ツバキ科―チャノキ、ヤブツバキ、モッコク、ヒサカキ、モチノキ科―イヌツゲ、モチノキ、キョウチクトウ科―テイカカズラ、グミ科―ツルグミ、ミズキ科―アオキ、ウコギ科―ヤツデ、キヅタ、ヤブコウジ科―ヤブコウジ、マンリョウ、モクセイ科―ギンモクセイ、ネズミモチ、トウネズミモチ、ヤシノキ科―トウジュロ等で、これらの種子の散布をみると風によるもの、重力によるもの（落下）、鳥、獣等によるもの。観音山は群馬県でも稀少な温帯林域である。ツルグミは固体数が非常に多く、開花は10～11月頃が普通であるが、1月にまだ開花しているものが見られた。

※前にも発表したかと思うが、アベマキの巨木目通り周2m余、それに近いもの3本の他に幼木～成木等非常に多くがみられる。また、群馬県内にはヤマザクラがないといわれていたが、観音山には太いものがある。ケヤマザクラも確認している。現在、ヤマザクラの自生地としては他に前橋の橘山で確認されている。

ヤドリギの切断面

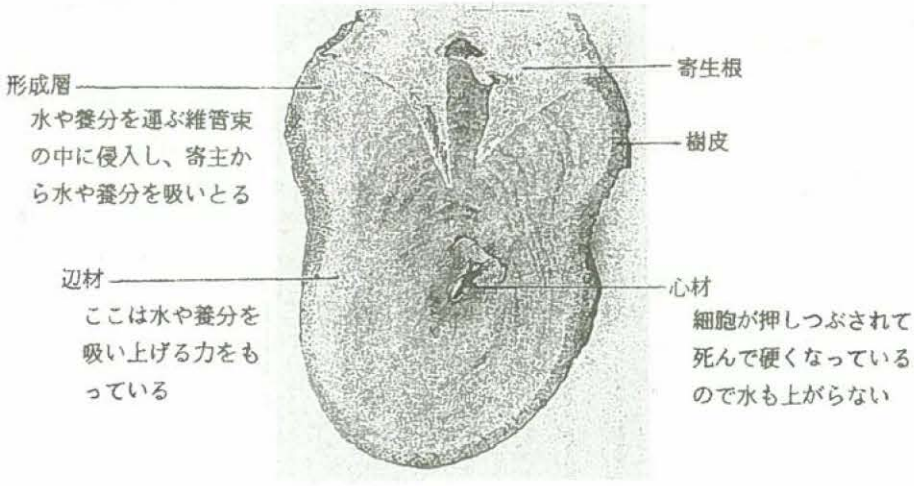
里見　哲夫

山々を彩っていた紅葉が終わりを告げると落ち葉の季節となります。この頃の野山を歩いていると時々不思議な光景を目にすることが出来ます。葉を落とした枝や幹に大きな鳥の巣のようなものを見たことがありますか。エノキ、ケヤキ、ミズナラ、ナシ、サクラなどによく寄生する常緑の小低木ヤドリギです。下仁田町周辺では「ホヤ」とも呼んでいますが、これはこの地方の方言名ですが全国的な呼び名のようです。雌雄異株で、2～3月頃が開花期で、10～12月頃に淡黄色の果実をつけます。茎は2叉で、2～3叉の側枝を出して年々1節ずつ伸びてその先に2枚の対生した葉をつけます。

果実は野鳥によって運ばれ繁殖します。果肉は粘着質なので種子がくちばしにつくと枝や幹にこれをすりつけます。また、食べられた果実はふんと一緒に種が排出されて枝や幹に粘りついて発芽します。根の先端からは樹皮をとかす酵素をだして枝や幹に食い込んでいきます。ヤドリギは光合成をして養分をつくり出すことが出来ますが、それだけでは不足しますので、樹木に寄生して水や養分をもらって生きています。全寄生をするネナシカズラは発芽して茎が成長しますと根は枯れて全て寄主に頼って生きていきますが、ヤドリギのような植物は半寄生植物といいます。

２０１２年秋、たまたま友人からヤドリギの寄生部分の切断片を入手しました。話によりますとヤドリギを切り落としている現場を通り掛かった際、懇願してその寄生部分を切り取ってもらってきたとのことでした。彼は哺乳動物を専門とする研究者ですが、植物にも深い見識を持った友人です。その貴重さを充分知っていてのこと、私にもおすそ分けしてくださいました。寄生主はミズキとのことですが、ミズキは県内各地にありますが、ミズキへの寄生ははじめて知りました。今までヤドリギは数限りなく見て来ましたが、切断面を見る機会は全くありませんでした。早速切断面をサンドペーパーで丹念に磨き上げて観察をして見ました。なんと寄生根が寄生主に侵入してクサビ形をしていました。こんな状態でヤドリギを支え、水分や養分を吸収するために維管束部分にまでも広がりを見せていることが分かりました。更に、横断面をよく調べて見ますと、何と年輪まで観察することが出来ました。友人の心遣いがなかったら一生寄生根の正体を垣間見ることが出来なかったと喜び一入のものがあります。この機会を頂くことが出来た友人に感謝、感謝の念が一杯です。

寄生木の断面



植物歳時記（61）
イワウチワ（岩団扇）

吉田　龍司

雪解けの溢るるひかり岩団扇
雪解けのかすかな気配岩団扇　　龍司

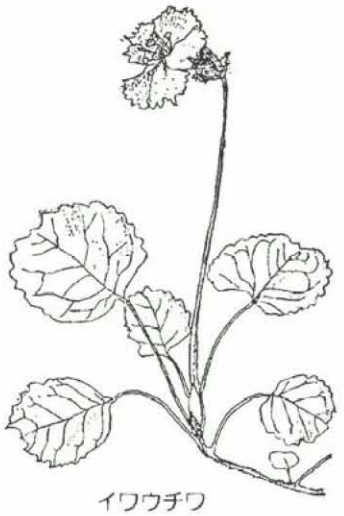
人には誰にも思い出があるように、特別に好ましく感じる花がある。それが高山植物や稀産の植物だったり、路傍に咲くスミレなどにも愛着を抱いたりする。イワウチワは私にとってそのように思える花の一つである。

春四月ともなると、心は山野へと馳け巡り、未だ残雪の煙る山に繰出すことになる。行き先は谷川や甲斐の山々が主だが、近頃は信濃や、越後にもプラントハンターよろしく出かけるが、採取は一切しない。早春季の妖精のような花たちに挨拶を送るだけ。健気にもひっそりと陽だまりに咲く花に出会うと、唯、嬉しさが込み上げ以降の山行が祝福されたと勝手に解釈している。その花のひとつがイワウチワなのである。

『花の百名山』（田中澄江）に「大岳山＝イワウチワ」の項がある。大岳から続く馬頭刈尾根の林の日陰に咲くイワウチワに初めて遭遇し、「未知の世界に出会った思いで心が晴々とする」と述べている。そして「改めてイワウチワを求め、周辺を探索したいと」書いているが、その希望は叶えられたのであろうか。また石井昭子は『一人がいい。花の山旅（関東甲信越70路）』猪狩山～秩父御岳山（荒川村）でイワウチワを掲載している。「出来るならイワウチワを群落で見たい！」とかねがね憧れていたと書いている。そして人の手の届かぬ崖ぷち一面に群れ咲く姿に圧倒された感動を綴っている。

イワウチワはこのような感動を与える植物だと改めて認識したしだいである。

大分昔私も、どちらのコースも歩いてイワウチワに遭遇した感動を思い出した。


イワウチワ

イワウチワの学名は Shortia uniflora (Maxim.) Maxim. ショルティア・ウニフロラという。属名のショルティアは英国人でW・Short氏への献上名。小種名ウニフロラは「一花の」の意味で、花茎の頂に一花付けることを表している。

分布は本州近畿以東で、名前から岩場にのみ生育する草花と思われがちだが、多くは山地の瘠尾根や半陰地の林縁にしばしば群生し、高さ10cmほどの小低木である。

図鑑には、地下茎は長く伸びて根出葉に長い柄があり、葉身は楕円形で縁には波状の鋸歯。葉質は硬くて光沢があり、葉の先がわずかに窪む。4～5月、葉の間から花茎を出し淡紅色の美しい花を頂に1個開く。花茎基部は数個の鱗片があり、萼片、雄蕊はともに5個、雌蕊1個。花冠は径2.5～3.0cmで広い鐘形。裂片の縁はフリル状に細かく裂け、お洒落な感じがして女性には特に人気があるようだ。

蒴果は楕円形で先が尖り、熟せば多くの種子を吐き出す。

亜高山帯に自生する仲間のイワカガミにも、美しさは決して引けをとらない。イワカガミ（岩鏡）は、イワカガミ属に分類され、花は総

状に付けるのでイワウチワとの区別は容易である。因みにイワウチワもイワウチワ属が立てられていて、変種に葉が広楕円形で基部が円形かクサビ形になるものを「トクワカソウ」(徳若草)と呼んで区別される。また葉が円形で4～8㎝あるものを、「オオイワウチワ」(大岩団扇)として分けることもある。分類上紛らわしい個体もあるので、これを区別しない見解もあるが、何ともややこしい。

これ等イワウチワは、人気ある植物ゆえ採取圧が高く、自生地でもたやすく見られなくなってきたことは寂しい。

「日本の誇るべき草」として八代田貫一朗は『野草の楽しみ(朝日新聞刊)』にイワウチワを取り上げている。氏は英国キュウ王立植物園で研究した世界的園芸家であり、こよなくイワウチワを愛し、栽培の難しさを説いて自生地の採取を戒めている。

イワウチワの種の保全状況評価(レッドリスト)は、山梨県は絶滅危惧種(EN)、東京都、鳥取県は準絶滅危惧種(NT)に指定しているが、環境省や群馬県としての指定はない。ただ、環境省により、上信越高原国立公園、中部山岳国立公園、八ヶ岳中信高原国定公園などでは自然公園指定植物とされている。

イワウチワの方言は『日本植物方言集成(2001)』には、「いわざくら」唯ひとつで、山形(鶴岡市)、埼玉(秩父)でのみの収録である。イワウチワはこのことから見て、メジャーな植物でないことが伺い知れる。イワウチワ好きを自認する私にとっては、残念でならない。

・花言葉　春の使者、適応力
・誕生花　3月18日

図鑑の内と外
植物私記㊲ ロウヤガキ

佐鳥　英雄

NHKの番組(13・1・26)を見ていると新しいクイズ番組らしい、「ドラマナビヤ」とかいうのがあって、色んなことを教わりました。女子アナウンサーが番組の最後で、「通学路ということばは辞書に載っていません」というので、〈おや、まア〉と思いました。常識では〈ある〉と思いがちですが、手許の〈広辞苑〉などに当りますと、ほんとにありませんでした。〈通学〉〈通学生〉〈通学区域〉などがあります。「割りと新しいことばで…」とは、アナウンサーの言。こういう経験は私もずいぶんしています。たとえば今調べている〈十草〉がそうです。十草は焼き物の模様で、ただ縦に線を並べたもの。当然土瓶の図案化と思われるのですが、器のラベルではみんな十草です。この十草にまた沢山の種類あって、私がここ2年ほどで数えた合計は30くらいになっています。菊十草・粉引十草・白十草・藍錆十草・花十草・モダン十草…。まさかジュウソウでもあるまい…と思って調べもしましたが、ありません。国語辞典は、そんな当て字は認められないという立場なのでしょう。いったい日本語、ことばの数はいくつなのか。一億以上はあるのでしょう。重い国語辞典でもせいぜい25万語くらいですから、その何百倍もということになります。載っていないことばが山ほどある訳です。じっさい、日々辞書と遊んでいる私など、ずいぶんずいぶんと、この〈ない〉に出会っています。一つだけ例を挙げましょう。お料理で使うらしい名残りの柚子。この美しい日本語は〈広辞苑〉などにはありません。

12・12・21。私は私が代表の鳴神塾という、植物研究会の昼食会に出席していました。その時たまたま私と席が向かい合いの小林(光子)さんと、雑談していたのですが、半可通

の私は、「小林さん、ジョウビタキの名前のいわれを教えましょうか。」などといって、解説を始めていたのですが、私の話が終わったところで、隣の稲毛（千恵子）さん曰く、「先生ねえ、こういう機会だから教わっておこうと思うのですけど、ロウヤガキって、どうして言うのでしょうか。」浅学菲才。たちまちジスイズ　ブラインド　アーリー。（袋小路）「漢語なんでしょうから、少し調べれば分かりますよ」で、その場は凌いでおきました。

さて、帰宅して、例の詮索癖でまず国語辞典に当たります。全くあたりません。図鑑をいろいろと探します。ありません。盆栽関係と考えて手許で探し、本屋に飛びますがダメです。木の育て方ばっかり。図書館で百科事典その他。でもダメでした。〈日本国語大辞典〉でさえダメ。記載そのものがない。家に戻って、〈大漢和〉を探しました。出てきました。「老鴉　鴉の白項のものをいふ」。以下、〈正字通〉や〈本草綱目〉からの引用。熟語として①〈老鴉陳〉②〈老鴉眼睛草〉③〈老鴉酸漿草〉②と③はイヌホオズキのこととか。項の白いカラスが中国にはいるのかなア…。詮索癖症のウィルスが暴れ出してます。ロウヤガキ桐生盆栽会会長みたいな人を探し出して聞きましたが、〈そういう方面のことは……〉ということでした。

そんな作業の途中、私はふと、インターネットで分かるんじゃないかなア…と考えたりしたのですが、やらない私はそのことはすぐ忘れてしまいました。

いつか年が明けて13・1・13。桐生市自然観察の森の新年会に出席していました。ざっと35人の参加。これだけ人がいても、私はいつか最高齢のようでした。森の行事をほとんど欠席している私は、顔見知りが10人くらい。こうして、小さな場所でも歴史はめぐっていくのだなア……と、変に感銘し、今浦島の心境でもありました。最高齢ということで、挨拶要員です。私は身辺雑事のことから話し始めました。ロウヤガキ、この名前の由来を目下研究中……。宴が終りかけた頃4～5人が私のところに雑談に来てくれました。山岸〈正子〉さんもその一人。

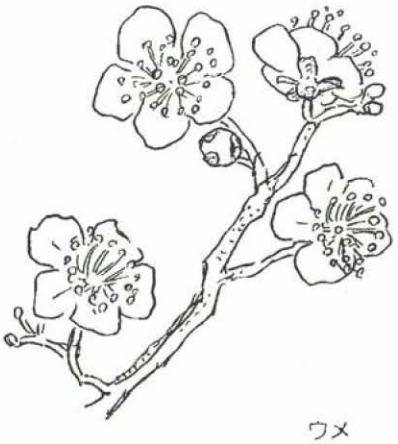
「ロウヤガキねえ、私も育てていて、二、三年前一個ずつなって、今年は十くらいなったんです。どうなのかな？って思って黒くなってたのをみたら、食べられるんですよ」「えっ？あれ、僕もオレンジ色のを食べてみたけど、それはひどいことで、口の中がどうにかなっちゃって、恐ろしいんだよ」「それがちゃんと甘くなるんです。マメガキだってさ、おいしくなるじゃん」「マメガキはおいしいね。ちゃんとタネも入っていて」

うろ覚えの会話の内容です。

「私が食べた後で、小鳥もそれを思ったのか、残りの実はたちまちなくなっちゃったんですよ」

山岸さんはこうつけ足していました。

さて、それからまた五日後、今度は私の勉強会（鳴神塾）。私は昼食会から始まったロウヤガキの調査の経過などを簡単に報告し、何か分かるようなことがあったら教えてほしいと伝えました。なお、ロウヤガキにもいくつか種類があることもつけ加えておきましょう。



ウメ

この二日後、つまり13・1・20　山岸さんから電話。

「あのね、ロウヤガキのこと、インターネットで探してみました。なかなか出てこなかったけど、最後に黒くなるので老鴉って…。先日、私たちが話してたとき、もう結論は出てたんだ……と思って…」

これも録音ではなく、うろ覚えです。でも、私はちょっぴり感激もしていました。このカキがどこまで黒くなるのかはよく知りませんでしたが、山岸さんの言うとおり、一応の結論を得た……と、思えるからでした。山岸さんの、少し遠慮した、断定を避けた口調も好感が持てました。自然科学に身を置く人は、ふつう謙虚な物言いをするからです。その一方で私は、あるいは別解として、私が食べたあの、口がひん曲がるほどの恐ろしさが、老鴉に通じはしまいか……などとも思っているのでした。〈大漢和〉の説明をもう少し聞きましょう。

「時珍（本草綱目の作者）曰、烏鴉大觜而性貪、鷙好鳥、善避繒繳（ソウシャク・鳥を捕る網）古有鴉経、以占吉凶、然北人喜鴉悪鵲、南人喜鵲悪鴉、惟師曠以白項者爲不詳、近之。

などと、ずる賢い鳥として鴉が描き出されているからです。さて、どちらか。

私は勉強会で、以上のことを皆さんに紹介し、更に考えてみたいと思っています。

なお、兼好に倣って、蛇足を加えますと、今の世、○○力とか、どうすれば○○するとかの本が流行っています。行き難い世の中になったからでしょうが、こういう本のほとんどが、「私のようにしなさい」という指南書です。自然科学はその構造が基本的にちがいます。自然科学は、事実はこうですと指摘します。満艦飾ではなく、大坂城の土台石に似ています。私はそれを、「形容詞ではなく名詞だ」と言います。

この一文を下書きした後、私は朝日新聞13・1・27で、「ニュースの本棚・あふれる○○力」という記事に出会いました。論旨はほぼ私と同じ。私のほうが少し早いので、このままのこととしました。諺に、「人の心は九分十分」「人の目は九分十分」と言います。人の目や心の働きに大差はない…ということ。よくある一致というのでしょう。

なお、カラスは漢字で、烏・鴉・鵶。みんな鳴き声アの表音文字です。（正しくは形声文字）

13・1・29、清水（シズヨ）さんからロウヤガキが届きました。ご近所のものとか。熟した実は黒とまではゆきません・黒褐色。食べてみると甘い。もう一つ……とはゆきませんが。ヒヨドリが食べにくるのだそうです。ヒヨドリの奴……、今日（13・2・6）は雪、私の家のキンモクセイで雪を避けながら、その葉っぱを食べています。もちろん主食としてではなく、少し食べるので、腹の虫でも殺すためか……とも思うのですが、キンモクセイの葉を食べることだけはマチガイありません。私はその葉を保存していますが、冬が来ると毎年のことなので、そんなことしなくてもよさそうです。

なお、清水さんはインターネットで取り出した資料も添えてくれました。「きりもなく出てくるんですとか。戴いた資料には、名の由来のことはありませんでした。

ロウヤガキ

群馬の地質
村誌余話

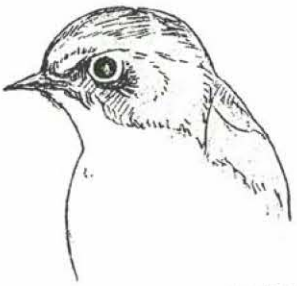
飯島　静男

『倉渕村誌』執筆の話は例によって小林二三雄先生からのお声がかりであった。県の学術調査で歩いたのは烏川源流のみ。相間川流域はすでに地質図があるが、ひとの研究成果をケチ付けながら引用はできない。なにより広大な未踏査の山々がある。それで最初は断わったのだが、5年かけるというので、まぜてもらった。

編集委員会の発足が遅れ、1年目を棒に振って、2年目せっせと歩いて、村内を半分調査したところで、3年目の5月頃、自然編は先行出版につき、9月には原稿を提出せよと言われ、あわてた。小林先生、話が違うではありませんか。

学術論文のようには書かぬとの申し合わせをいいことに、思いつくまま長々と綴ったが、体系立ててないので、要点をかいつまんで知りたい人にとっては、たいへん読みづらいものになってしまった。

それでも昨年敢行の5万分の1地質図「榛名山」の著者は丹念に読んだらしい。細尾軽石流の中のジルコンを抽出して、鉱物年齢を測定してくれた。その値170万年前は実に絶妙なところを突いている。いわば恩人のその著者に「地質図に誤りがあるよ」と手紙を送ったのだから、我ながら馬鹿をやったと反省している。

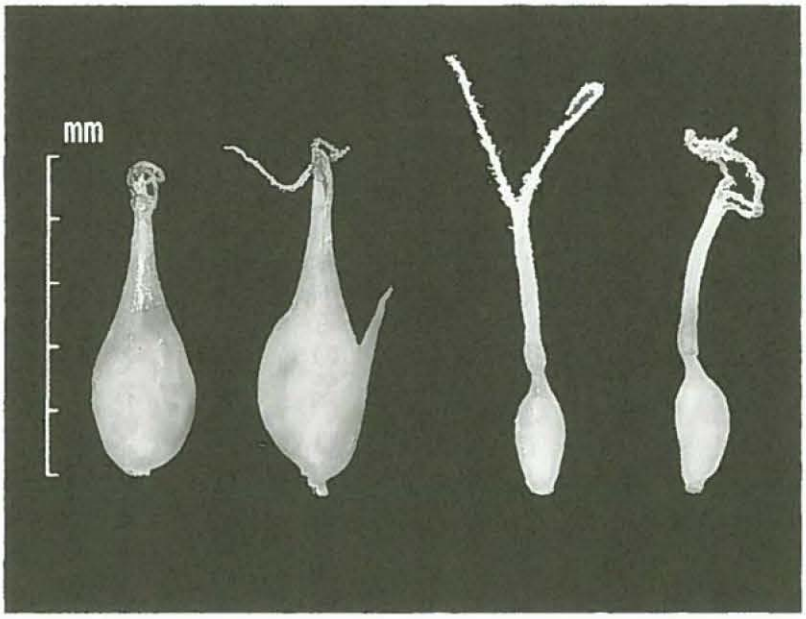


ルリビタキ

植物をミクロで見る（9）
ヤワラスゲ

青木　雅夫

遊水地で撮った写真を探していたら、これが出てきた。駐車場のわきに生えていたもので、その時はアワボスゲを探していた。ひとつのものを探していると、何でもついにそれに見えてくるから不思議だ。探索は失敗に終ったが、よく似たヤワラスゲに笑われている気がした。小穂に傷が付いたり、乾燥させたりすると焦げ茶色に変色するスゲ類の中のひとつ。高さ30―60㎝位で低地の河原や遊水地みたいな所の草むらによく生えているので結構出会う植物です。果胞は長く先が伸びて、嘴の先は斜めに切れています。柱頭は3岐であるが写真〔右から2番目〕のように2岐のもたまに見られます。痩課はまだ若いので形がはっきりしないが、3稜形です。



残された自然の中で（160）
観音山鳥日誌⑥

谷畑　藤男

冬鳥再来

観音山の職場で三度目の冬を迎えた。二年前（２０１１年１月）はマヒワの多い冬だった。昨年（２０１２年１月）は鳥が少なく、ツグミやシメさえも稀であった。今年の観音山は冬鳥の数が多く、種類も豊富である。

アオバト（ハト科）

アオバトは奥多野地域に多く生息し、繁殖期から晩秋にかけて塩水を吸飲する習性がある。木の実や果実を餌にするため秋には暖地に移動するが、木の実が豊作の年は冬まで残る個体もいる。初夏の観音山で「オーアオーアオー」という特徴のある声を聞くこともある。12月20日、染料植物園の付近のムクノキ枝にアオバト雄がとまっていた。枝には黒紫色の果実が残り、アオバトはこの実を食べていた。初夏の森でアオバトの姿を探すのは難しいが、落葉の林では黄緑色のハトはよく目立つ。ムクノキにはシロハラも飛来し、実を食べていた。

キクイタダキ（ウグイス科）

キクイタダキは亜高山帯の針葉樹林で繁殖し、冬は低山に下降する。日本では最小、名前のとおり雄は朱色、雌は黄色の菊花のような斑が頭頂にある。今冬はキクイタダキの越冬数が多く、スギやヒノキ林でよく見かける。高木の針葉樹枝先でホバリングをまじえ、昆虫を捕食する。動きの速い小鳥を観察するのは容易でないが、吊り橋が観察場所として最適であることに気づいた。谷間に架かる橋に立つと、キクイタダキの活動の場であるスギやヒノキの樹冠が眼下に見える。12月22日、キクイタダキの小群が採餌する様子を見下ろして観察した。この位置からは頭頂の色もよく見えた。

ミヤマホオジロ（ホオジロ科）

ミヤマホオジロは極東や朝鮮半島で繁殖し、冬鳥として日本に渡来する。キャンプ場にミヤマホオジロが姿を見せたのは、雪が降った2月6日。カシラダカに混じって給餌台に飛来した。薄黄色の眉斑と時々立てる茶色の冠羽が特徴である。雌のミヤマホオジロはカシラダカに似ているが、やや大きい。この個体は以後よく飛来し、カシラダカやアオジとともに粟粒をついばんでいる。

クロジ（ホオジロ科）

クロジは奥利根や谷川連峰など多雪地域のブナ林上部で繁殖する。林床にササが密生した初夏のブナ林では、クロジの「フーィ　チヨチヨ」という囀りを聞くことができる。

2月8日、「野鳥の森バードハウス」の給餌台。室内から窓越しに、餌を拾うクロジを観察する。10羽のクロジがアワやヒマワリの種子そして牛脂をついばんでいる。距離が近いため、成鳥雄・若鳥雄そして雌の体色の違いが肉眼でもわかる。

冬の観音山ではクロジは、林道でもよく採餌している。運転中、道端の小鳥を見てもアオジと思い通過することが多いが、停止して双眼鏡で確認するとクロジのこともある。クロジの成鳥雄は名前のとおり青みをおびた黒色であるが、林道の木漏れ日を浴びると、背面が黄金色に輝くことがある。

オオマシコ（アトリ科）

オオマシコは数の少ない冬鳥で、観音山で見ることは稀である。2月13日、染料植物園付近の車道法面で、餌を探す赤い鳥の小群を見つけたが、車の通過で飛んでしまった。翌日14日、白衣観音足元の遊歩道でこの群れに再会。赤い雄2羽と黄色みをおびた雌3羽。

それぞれがハギの細い枝にぶら下がり、先端に残った種子をついばんでいた。観音山で初めてオオマシコを見たのは40年前。土産物店が並ぶ陽だまりの斜面で、赤い鳥はやはりハギの種子を食べていた。

2月25日、オオマシコを見るため安中市の小根山森林公園に行く。管理棟前の餌台にオオマシコとアトリが群れ、平日であったがカメラマンが十名いた。オオマシコは2月15日より小根山に飛来、最高21羽を確認とのこと。今冬はオオマシコも各地で観察されている。

ソウシチョウ（チメドリ科）

12月の中旬から、ソウシチョウの群れをよく見かけた。ササ薮のある林がソウシチョウの越冬地。林道上でヒノキの種子を食べている。車が接近すると、ガードレールを超えて薮に逃げ込むがすぐ出てくる。1月7日、乗附林道で20羽の群れを見た。また2月11日にはガビチョウ1羽が、2月14日にはクロジ2羽がソウシチョウの群れに混じり、路上で餌していた。

ソウシチョウはガビチョウやカオジロガビチョウと同じ、チメドリ科の外来種である。江戸時代からすでに輸入され、1990年代に野生化が記録されているが、県内で目に付くようになったのは最近である。またガビチョウは留鳥であるが、ソウシチョウは観音山では冬鳥で、初夏には繁殖のため山地に移動する。

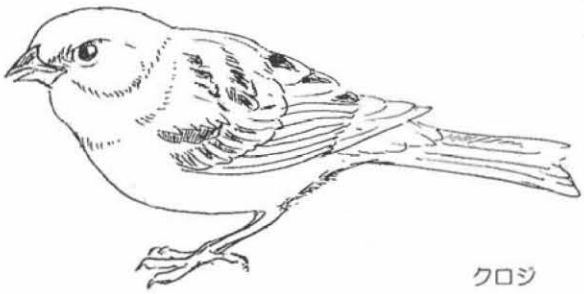
観音山における今冬の観察記録（2012年12月～13年2月）は次のとおりである。

アオバト（12月20日、染料植物園雄1羽）・ビンズイ（2月2日、のぞみの園3羽など）・カヤクグリ（1月23日、染料植物園1羽）・ルリビタキ（1月28日、ジョイナス雄1羽など）・ジョウビタキ（2月9日、ジョイナス雄1羽など）・トラツグミ（2月2日、染料植物園1羽）・シロハラ（12月20日、染料植物園など）・ツグミ（2月28日、ジョイナス1羽など）・キクイタダキ（1月22日、ジョイナス2羽など）・ヒガラ（12月22日、染料植物園4羽など）・ゴジュウカラ（12月24日、

オオマシコ（2013. 2. 14）

キクイタダキ（2012. 12. 22）

野鳥の森1羽）・カシラダカ（2月8日、ジョイナス5羽など）・ミヤマホオジロ（2月13日、ジョイナス雌1羽など）・アオジ（2月8日、ジョイナス2羽など）・クロジ（2月10日、乗附林道3羽など）・アトリ（1月27日、ジョイナス1羽など）・マヒワ（1月21日、ジョイナス3羽）・オオマシコ（2月14日、白衣観音下遊歩道5羽など）・ベニマシコ（2月13日、白衣観音下4羽など）・ウソ（2月22日、ジョイナス雄1羽、雌2羽など）・ニュウナイスズメ（2月10日、みやま養護学校付近150羽など）・ソウシチョウ（12月22日、乗附林道5羽など）



クロジ

本の紹介

「植物の不思議な生き方」稲垣　栄洋

朝日文庫　620円

花の色はいろいろあるが、春先は黄色そして新緑の森には白い花が多いと感じていた。この本を読んで疑問が解けた。ナノハナやタンポポなど群れて咲く黄色花は、早春に活動を始めるアブ好みの色。白い花を選ぶのは夏になると現れるハナムグリやハナカミキリなど甲虫たち。甲虫は花粉媒介の先駆者で、蜜には見向きもしない古いタイプ。紫色や赤色の花にも理由がある。この本には植物と昆虫の関係や直物の生活など興味深い話がいっぱいある。

編集からのお願い

ラムサール条約に昨年登録された、広大な湿地「渡良瀬遊水地」を特集しました。県内には大小の湿地や湖沼がたくさんあり、貴重な動植物の生息地になっています。今後、地域ごとに紹介・特集できればと考えています。ご意見をお寄せください。

次号の特集は「ぐんま百名山の自然　日光付近の山々」を予定しています。対象は四郎岳・温泉ヶ岳・金精山・日光白根山・錫ヶ岳・皇海山の六山です。原稿の締め切りは6月15日です。自然保護に関するご意見や観察記録もお待ちしています。事務所宛にお送りください。よろしくお願いします。

イベント紹介

『とちお雁木通りにツバメを見に行こう』

新潟県長岡市の「栃尾ツバメと愛鳥愛護の会」では、雪国のツバメに関する展示や雁木通りに繁殖するツバメの観察を行います。本会の会員でもある木下弘さんのツバメ研究の成果も展示されます。栃尾は棚田の風景と巨大油あげでも有名です。興味ある方は「群馬の自然」165号の「栃尾のツバメ・谷畑」を参照下さい。

期　間　平成25年5月3日(金)～5日(日)
展示時間　10時～16時
会　場　栃尾新町　新町地区会館
　　新潟県長岡市栃尾大町4－34
＊バス停留所長岡市栃尾支所から徒歩2分。
入場無料です。

平成25年度 自然保護対策委員会 視察予定

場所	月日	時間	集合場所	備考
叶山鉱業所　鉱石採掘場	未定	7：30出発	群馬県自然保護連盟　駐車場	周場の植物移植地を視察します
東京電力㈱　西上武幹線現場	未定		〃	鉄塔建設地の周囲を視察します

平成25年度 自然観察教室

開催日	開催場所	テーマ	時間	コース・歩程	費用
4月 7日(日) 申込者多数の為 大型バス使用	高尾山（たかおさん） 599m （東京都） 都会からひと足の別天地。2007年ミシュラン3ッ星指定の東京の山。	サクラ と スミレ探訪の トレッキング [高尾山で命名された植物は60種を数え、特にスミレは16種観察できます]	日帰り 出発　6：30 帰着　17：00 （雨天決行）	高崎→高崎IC（関越道・圏央道）→狭山SA→高尾山IC→高尾山渓流ケーブルカー→高尾山頂駅…薬王院…高尾山ビジターセンター…高尾山…もみじ平…一丁平…城山…日陰沢林道…日陰バス停→高尾山IC（圏央道・関越道）→高坂SA→ 高崎IC→高崎車庫 ★歩程：約2時間45分　家族向け初級	5,000円 45名
7月27日(土) ～28日(日) 中型バス使用	猫魔ケ岳（ねまがだけ） 1,404mと 雄国沼湿原（福島県） 化け猫伝説のユニークな山。頂上の展望は特に素晴しい。雄国沼は日本秘境百選に選ばれ、高層湿原は国の天然記念物指定で植物相は280種にも及びます。	伝説の一等三角点を辿り、高層湿原植物と会津民話の旅 ミズバショウ、ヒオウギアヤメ、トキソウ、ワタスゲ、キンコウカ、ハクサンシャクナゲ、ゴゼンタチバナ、タチギボウシ、ミズギク、コバイケイソウ、 ヤナギラン、ヤマユリ、クガイソウ	1泊2日 出発　5：30 帰着　19：00 （雨天決行）	27日: 高崎（北関東道・東北道・磐梯道）猪苗代磐梯高原IC－磐梯ゴウルデンライン－八方台入口…猫魔ケ岳…猫石…雄国小屋…雄国湿原周遊…雄子沢－桧原湖経由～熱塩温泉（宿泊） 28日:観光しながら 熱塩温泉－蔵の町喜多方～八重の桜大河ドラマ館（観光）－磐越道河東IC－（東北道～北関東道～関越道）－高崎ＩＣ－高崎車庫 ★歩程：約4時間6分（往路）　一般向け	20,000円 25名

※ 会員のみ：要予約。 往復とも貸切バスを利用します。 詳細は申込みあり次第郵送します。
※ 集合場所：上信観光バス㈱　　※ 駐車場：群馬県自然保護連盟駐車場＆東和銀行高崎東支店駐車場

平成25年度 「自然観察会」

主催 NPO法人群馬県自然保護連盟
共催 群馬県環境森林部自然環境課

	場所	開催日時	対象	内容・テーマ	集合場所	定員
①	荒山高原・荒山	5月26日（日） 9時 ～ 15時	一般	赤城山のツツジや野鳥を探勝しよう	木の家ローラー滑り台駐車場 【林道鍬柳相吉線】 （前橋市富士見町貫輪）	30名
②	大峰沼と古沼	6月30日（日） 9時 ～ 15時	児童と保護者	モリアオガエルに会いに行こう	大峰山駐車場（利根郡みなかみ町小川）	30組
③	赤城山・水源の森	8月4日（日） 9時 ～ 15時	児童と保護者	川遊び、水生生物や昆虫の観察	赤城山水源の森 駐車場（沼田市利根町）	20組
④	鈴ケ岳	9月8日（日） 9時 ～ 15時	一般	赤城山の巨石と展望を楽しもう	赤城町深山キャンプ場駐車場（渋川市赤城町深山）	20名
⑤	草津・芳ケ平	9月29日（日） 9時 ～ 15時	一般	秋の高原の風になろう （高原の植物観察）	白根山レストハウス有料駐車場 （吾妻郡草津町町草津白根）	30名
⑥	渡良瀬遊水地	10月6日（日） 9時 ～ 15時	一般	ラムサール登録地ってどんなとこ？	谷中村史保全ゾーン駐車場 （北エントランスより） （栃木市藤岡町）	30名
⑦	妙義山中之嶽神社 から石門めぐり	11月17日（土） 9時 ～ 15時	一般	奇岩の山の紅葉を探勝しよう	中之嶽神社大駐車場（甘楽郡下仁田町上小坂）	30名

<注>①事前に申込が必要です。定員を超えた場合は先着順となります。
②ハイキングの出来る服装(動きやすい)、弁当、飲み物、雨具。双眼鏡やルーペがあると便利です。
朝から雨の場合は中止する場合があります。連絡は携帯電話へ（090－4833－5789）
③「水源の森」は浅い川に入ります。川遊びのできる服装、運動靴でご参加ください。
④参加者は資料代、傷害保険に加入するため参加費（小学生以上一人300円）が必要です。

平成25年度 自然環境保全地域での自然観察と保護活動

主催 群馬県環境森林部自然環境課

	場所	開催日時	テーマ	集合場所	定員
①	鳴神山	5月12日（日） 8時 ～ 15時	カッコソウやナルカミスミレを探してみよう	駒形登山口　林道奥駐車場（桐生市川内町）	30名
②	赤城山	5月18日（土） 9時 ～ 12時	赤城山のサクラソウ保護と野生動物の食害を考えよう	赤城町深山バス停集合→移動［林道・赤城白樺線］（渋川市赤城町深山）	30名
③	相馬山 黒岩	6月23日（日） 9時 ～ 15時	春の動植物の息吹に触れてみよう	榛名ヤセオネ峠駐車場［相馬山登山口付近］（渋川市伊香保町）	30名
④	榛名山 沼ノ原	7月14日（日） 9時 ～ 15時	オオハンゴンソウ駆除と沼ノ原の自然観察	榛名湖ビジターセンター駐車場（高崎市榛名湖町）	80名
⑤	鍋割高原 鍋割山	10月13日（日） 9時 ～ 15時	秋の花を求め、関東平野の遠望を楽しもう	国立赤城青少年交流の家駐車場［林道・鍋割相吉線］鍋割高原登山口へ車で移動（前橋市富士見町）	20名

＜注＞
① 事前に電話でお申込みください。
　参加希望者が定員を超える場合は先着順となります。
② 参加費は無料です。
③ ザックに雨具、昼食、水筒等を入れて各自持参してください。
④ 軍手・ゴミ袋は主催者が用意します。
⑤ 傷害保険に加入していただきます。(参加者の費用負担はありません)
⑥ 朝から雨天の場合は中止します。

当日の連絡先　090-4833-5789

申込先　　NPO法人 群馬県自然保護連盟

事務局日誌（168）

12月19日　県自然環境課「業務打合せ」来所
12月21日　太平洋秩父セメント㈱年末挨拶
12月22日　赤城学ｓｔｅｐⅢ講習会
12月23日　東北大震災クリスマスの集い（サンデン）
12月25日　会報原稿（冬号）印刷所渡し
12月26日　25年度表彰者推薦調書 県提出
12月27日　仕事納め
1月8日　関係官庁新年挨拶
1月9日　会報「群馬の自然・167冬」印刷校正
1月11日　赤城山覚満淵ササ狩り会議
1月17日　計理士と会計業務打合せ
1月18日　赤城山の自然保護活動推進協議会「企画委員会」
1月19日　赤城山環境ガイドボランティア養成講座ｓｔｅｐⅢ
1月20日　同　野外実践
1月22日　会報「群馬の自然・167冬」郵送
1月24日　赤城自然塾 運営会議
1月26日　赤城姫を愛する集まり「編集会議」
1月27日　牛久保雅美氏（9人の提言）講演会
2月2日　2月理事会 14名出席
2月7日　県農林水産業関係機関 成果発表会
2月8日　「ぐんま山と森月間」フォト・コン表彰式
2月9日　ぐんまの自然の「いま」を伝える報告会２０１２
2月11日　総会会場申込（県・生涯学習センター）
2月15日　県ボランティア推進室 打合せ
2月26日　県自然環境課「25年度行事打合せ」
2月28日　赤城自然塾　運営会議
3月2日　赤城姫を愛する集まり「新年懇親会」

表紙の説明

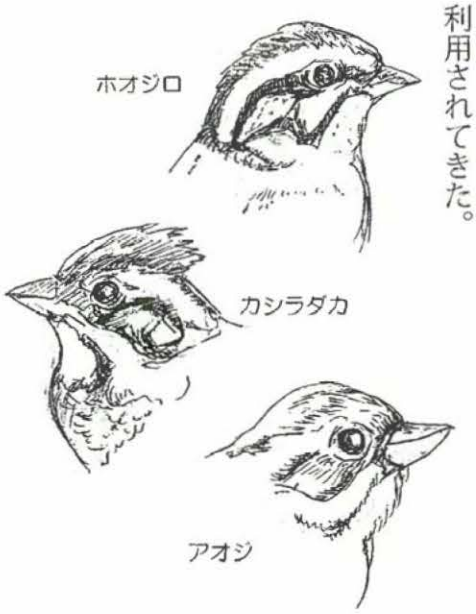
コブシ（辛夷）

モクレン科モクレン属の落葉高木。本州～九州まで分布するが、北海道や日本海側に分布する種は別種のキタコブシや、タムシバなので注意が肝心だ。コブシは萼片が有毛で、花のすぐ下に葉があるのが特徴である。

3月から5月、展葉前に木全体が白く見えるほど咲くので、冬枯れの山野でよく目立つ。

純白な花は直径6～10㎝。枝先に基部は桃色を帯び花弁は6枚。枝は太いが折れやすく、果実は「握り拳状」の集合果でこれが和名の由来となっている。

古くから春を告げる花木として親しまれ、「田打ち桜」などの名で農作業の生活暦として利用されてきた。



事務局だより

25年度行事案を掲載しました。県委託事業の日程等は広報掲載の関係から、総会の議決を待たずに実施されます。ご了承ください。

「定時総会」のご案内

日　時　5月11日（土）　9時半～12時
場　所　県生涯学習センター・第2研修室
住　所　前橋市文京町2-20-22
電　話　027-224-5700

※総会は規約により定足数が必要のため、出欠席ハガキ（委任状）を同封しました。準備の都合上、出欠席の如何を問わず必ずご返信をお願い致します。

第5回赤城山覚満淵「ササ狩り作戦」

日　時　5月19日（日）午前9時～12時
集　合　赤城山ビジターセンター駐車場

皆様のご参加をお願い致します。電話でご連絡ください。

新会員紹介（敬称略）

小板橋結子（渋川）　佐塚　直美（伊勢崎）

寄贈図書

三井田　進様・「森の自然学校」

・会計年度は4月1日～翌年3月31日です。振替用紙を同封しました。皆様の力で自然保護活動の輪を広げていきたいと念じています。会費納入はお早めにお願い致します。

樹木の葉痕

群馬の自然　168号

発行日　平成25年4月
発行人　NPO群馬県自然保護連盟
編集人　谷畑藤男
発行所　群馬県自然保護連盟事務所
〒370-0046
高崎市江木町610-10
電　話　027－324－5706
携　帯　090－4833－5789
振　替　00320－6－13239
会　費　2,000円(年間)